

36章1節~4節は、エレミヤ書がどのようにして成立したかという、この文書の起源について伝える重要な歴史資料と考えられています。ユダのヨヤキム王第4年(紀元前605年~604年)に、それまでエレミヤが行ってきたことを、全て書き残しなさいという、神さまの言葉がエレミヤに臨みます。エレミヤはバルクに口述筆記をさせました。紀元前605年、バビロニアはカルケミシュでアッシリアを滅ぼしました。ネブカドネツアル王はエルサレムに軍を進めました。ヨヤキム王は降伏したため、最悪の事態は回避でき、人々は平静を回復しました。その結果、人々はエレミヤの言葉を真剣に受け止めようとしませんでした。エレミヤは、断食の日に書き記した神さまの言葉を読むようにバルクに伝えました(6節)。この時の人々の反応は全く記されていません。

エレミヤは人々が神さまの元に立ち帰ることを求めていたのです(3、7節)。エレミヤは、「神さまは人々の滅亡を望んでいるのではなく、人々が預言者の言葉を警告として聞き、立ち帰るように招いている」と告げるのです。「立ち帰る」とは神さまから目を離していたのを神さまの方を向くこと、「回心」を意味します。ここでは、「……立ち帰るかもしれない」と表現され、人々の側に残されたわずかな可能性に神さまがなお期待して待つ意味が込められています。神さまは歴史を支配するエル・シャッドアイですが、人々の立ち帰りはどこまでも人々の自由で自発的な立ち帰りでなければならず、神さまがこれを強制することはありません。エレミヤは、神さまの言葉を語り、「神さまは人々が神さまの元に立ち帰ることを求めておられる」と、何度も告げています。神さまが怒られるのは、私たちが生きている歴史の中に神さまが生きておられることを示すものです(7節)。怒りもまた神さまの私たちへの配慮の表れなのです。

エレミヤは、「神さまの裁きが下るのだ。我々はバビロンに連行される。」そういう形で神さまの裁きが来ると預言しました。しかし、エレミヤは神さまの回復の約束「この国で家、畑、ぶどう園を再び買い取る時が来る」を信頼して故郷のアナトトに土地を買っているのです(32:6~15)。エレミヤのこの願いはかなえられたのでしょうか。残念ながら、そうではありませんでした。巻物は政府要人に回覧され、ついにヨヤキムの元にもたらされますが、王は配下のものに命じて巻物をすべて燃やしてしまいました。待降節にあつて、神の御子の到来を待ち望む時は、神さまの言葉を聞き、自分自身を見つめ、「それぞれ悪の道から立ち帰るかもしれない」と、私たちが立ち帰るのをどこまでも期待して待つておられる神さまに答えることを思い起こす時でもあるのです。